



伝統の 祇園祭

多古の夏を飾る風物詩と言えば、毎年7月25日と26日の2日間にわたって行われる祇園祭だろう。仲町・新町・本町の3町を氏子とする八坂神社の祭りである。その中でも、江戸時代から続いてきたとされる「しいかご舞い」。神社の境内に設けられた舞台と高さ10メートルもの柱上での「舞い」には、毎年多くの見物客が見入る。

親から子へ、そして孫へと脈々と受け継がれてきた伝統。

今年もお囃子の音色とともに「祭り人」たちの熱気がまちを包み込んだ。

戦時中でも行われていた 祇園祭の「しいかご舞い」

それぞれ感覚的に違いはあると思うけど、やっぱりみんな「自分たちの祭り」という意識が強いんじゃないかな。祭りになれば帰ってくる人もいるから、自分たちの中に根付くものがあるんだろう。自分にとっても「祭り」といえるのは多古の祇園祭だけ。ほかの祭りにも行ったことはあるけど、「よその祭り」という感じがするよね。

祭りでは、大人になるにつれてだんだん担う役割も変わっていく、それが積み重なって引き継がれていく。規則とまではいかないけど、参加の仕方や役割が年代によってはっきり分かれているから、そういう意味では、一体感みたいなものまでくる。

今後も祭りは継続していかなければならないけど、人手の減少が問題としてある。3町以外の小・中・高校生たちがどんどん参加してくれて、応援してくれる。楽しんでくれる。そんなふうには体で支えてもらわないと維持するのはだんだん難しくなる。ほかの3町でも自分の町内以外の参加はダメだということはないと思うよ。高校生も、2日間、体使って汗かいて、少しは発散したほうがいいんじゃないのかな。

自分の知る限りでは、屋台を引かないことはあったけど、しいかご舞いをやらなかったことはない。極端な話、八坂神社の祭りとしては、しいかご舞いだけでも維持していきたいという見方もある。だけど、ほんとは子どもの時から祭りに参加して、屋台の綱を引いてほしい。屋間は暑くて大変だったら、夜だけでもいいしね。

多古町の祭りと言えば、やっぱり祇園祭でしょ。みんなで盛り立てていければいい。



多古八坂神社総代
平山一男さん（新町）